

作品にみる自我のかたち

——漱石、実篤、直哉——

The Sense of Self in the Works of Souseki, Saneatsu and Naoya

呉 谷 充 利

キーワード 自我、『こころ』、『友情』、『暗夜行路』、『イヅク川』

はじめに

文学作品は時に作家の自我のかたちを鮮やかに映し出す。夏目漱石、武者小路実篤、志賀直哉はそれぞれに心的な交流をもっている。漱石は『こころ』の連載のあとを直哉に委ねようとし、実篤と直哉は深い友情をもつて結ばれている。これら三人の作家はある共通のテーマ性をもつ作品を遺している。恋である。

漱石の『こころ』は「先生」と呼ぶ主人公の恋をめぐって展開している。実篤の『友情』もまた約すれば同様のテーマ性をもつ。このなかで、直哉は正面切つてこうした恋の主題性をもつてはいないのであるが、自身の『暗夜行路』に向けられた評を「あとがき」に取り上げ、『暗夜行路』を恋愛小説だとするその見方を面白いと述べる。

筆者はこの見方に添って、この作家唯一の長編を考えてみたい。こ

うした共通のテーマ性をもつものとして漱石の『こころ』実篤の『友情』直哉の『暗夜行路』をここに挙げてみる。とりわけ、『イヅク川』は小品ながらもとても鮮明に直哉の自我の生きざまを語っている。この随筆的な小品を引いた理由である。

イヅク川

かれは伏してなお友を求める。友は書く。

この世に生きて君とあい

君と一緒に仕事した

君も僕も独立人

自分の書きたい事を書いて来た

何年たつても君は君 僕は僕

よき友達を持つて正直にものを言う
 実にたのしい二人は友達

(昭和四十五年 十一月十五日 実篤)

実篤は病床の直哉の求めに応えて童心ながらにこう書いている。直哉が他界する前年のことである。何気ないこの情景はじつは直哉の内面の世界に深く届いている。

志賀直哉は明治四十四年に小品『イヅク川』を「白樺」に書く。二十七歳のときである。『イヅク川』は夢の一景である。志賀の随筆集(岩波文庫)の筆頭にこの作品を挙げた高橋英夫は、リアリズムと幻視性の奇妙な同居をこの作品に見て「リアリズムが高まるにつれて、かえって幻視性が増大するという独自の心身的状態が志賀直哉の内部に存在していた」ことをいう。

一幕の夢にみる情景がみずみずしい筆致をもつてみごとに描き出される。「会いたい人」があるという。「踏む毎にジュワジュワと枯草や芥ににじむ」水の描写が清涼感を誘う。

その情景である。藪枯のからまる竹垣の広げられた一所をまたぐと、樫の木の間。ほどなくすると、大きな池のふちが見える。澄んだ水を一つばいにたたえている。水草の蔭に小魚が動く。遠くに町の家並が見える。「会いたい人」は其所にいる。浅くて広い池の所々に白鷺のようで嘴のそれほど尖っていない鳥が立っている。かれはイヅク川というのはいかにも思ふ。皆眠っている。

作家は夢のなかを歩いている。知人とすれ違う。通り過ぎてから振り返ると、知人は角の藪かげからちよつと顔を出して笑っていた。

夢がさめる。かれは「静かにそれを繰り返して見た。」『イヅクは何処

のなまりで」あったことに気付く。知人は「同じ学校にいた」「海江田」か「豊次」のようであったという。が「会いたいと思った人は思ひ出せなかった」と直哉は書いている。

心地よい清々しさ^{みずみずし}が瑞々しい情景に漂う。この夢の世界は何か事があつて、そのあとに流れた時間を想わせる。濡れた道、踏む毎にジュワジュワと枯草や芥ににじむその水は過去のものである。雨が降っていたとすれば、今、その雨はやんでいる。この情景の描写が夢には現れないある出来事を暗に示しているように見える。その顛末の後、かれは会いたい人を夢の道中に描き出している。が、ついにその人を憶い出せなかったという。

この夢の一景は自身が心中に秘めるものを現わしている。かれは人を求める。どんな人か。夢の道中とその風景がこれを示唆する。枯草や芥ににじむ道を踏んで、少し空いた所を工夫して通り抜ける道中、イヅク川のあるイヅク川つまり何処川^{いずく}が現われる。イヅク川は彼岸の世界を思わせる。が、そのイヅク川の向こうにいる人は「会いたい人」つまり此岸の人なのである。

現実の世界にかれは直に自身の気持が通ずるもう一人の人間を求める。求めるものは功利的、党派的なものではない。ある彼岸性をそのなかに含んでいる。夢に見る道中と景色はこの心中の世界をみごとに現わしている。この作家が存在する精神の一つの居場所をその作品は明瞭にしている。

今、仮にフロイト流の心理学にしたがえば、この夢は実生活上の何らかの出来事と関係していると思われるが、それを詮索することは筆者の意図ではない。むしろ、そえゆえに生じたこの作家の心的世界こそが大事なのである。そうした詮索は、場合によっては、ある出来事

の物理性とそこに生まれる精神性とを同質化してしまい、生の意味を平板なものにしかねない。平面的な生は、そこに生まれる固有の精神を見えなくする。

『イヅク川』に見るこの有様は、志賀直哉の精神の内部に届く。かれは『暗夜行路』に書いている。

「下らない奴を遠ざけるのは差支えないが、時任ときとうのように無闇と拘泥して憎むのはよくないよ」末松は突然こんな風に水谷の事をいい出した。

「実際そうだ。それはよく分っているんだが、遠ざける過程としても自然憎む形になるんだ。悪い癖だと自分でも思っている。何でも最初から好悪の感情で来るから困るんだ。好悪が直様すんざま此方では善悪の判断になる。それが事実大概当るのだ」

「それは当ったように思うだろう」

「大概当る。人間に対してそうだし、何か一つの事柄に対してもそうだ。何かしら不快の感情が最初に来ると、大概その事にはそういうものが含まれているんだ」

この件りは、この作家の心中の吐露さえであろう。つぎのことが述べられる。

然し謙作は自身の過去が常に何かとの争闘であつたことを考え、それが結局外界のものとの争闘ではなく、自身の内にあるそういうものとの争闘であつた事を想わないではいられなかった。

好悪は正確にいえばじつは相手からはじまってはいない。その感情

は謙作の心中と地続きに一体となって突き出ている。「過去の数々の事を考えると、多くが結局一人角力すもうになる所を想うと、つまりは自分の内にあるそういうものを対手あいてに戦つて来たと考えないわけには行かなくなった」のである。

『暗夜行路』の主人公のこの胸中は、作家志賀直哉その人のものである。争闘の一人角力の真ん中であつたものは自身とのたたかいである。かれは内に起きる感情を自ら反芻してその揺るぎなさを確かめようとしたといえる。

『天津順吉』はこの場面を描く。この私小説は自家の「女中」Cと自身との情交をめぐって対立する家族との葛藤を書いている。「家庭の問題でもありましようが、それ以上に私自身の問題ですからネ」と母に告げる順吉は自身の気持に従おうとする。内村鑑三を通じて学ぶキリスト教の教えは、かれの中で「妻にする決心のつかない女を決して恋するな」という戒律になった。

恋と妻の二文字は彼の中で同一のものとなつてその誓いを強いる。Cとのこの証しは自らの家族そのものを代償にする。順吉の心中が居いた重見の手紙に書かれる。千代との誓いに立ちだかつたものがあつた。踏み絵となる祖母の愛である。順吉に寄り添いながら、その手紙は同時に祖母の悲痛な心の世界を描いている。長文の手紙は順吉の心中にあるものを明瞭にする。文面にかれは涙ぐむ。「私のそのときにこのくらい適切な手紙はなかつた」のである。

突起した順吉の内面がそこに現わされる。文中のこの手紙が実際に書かれたものであるにせよ、それをヒントにしたものであるにせよ、注目すべきは、友の手紙にいわば委ねるかたちで主人公が自身の気持を表現している点である。友から出される手紙に自身の内面が映され

る。意識的であれ、無意識のそれであれ、そこにはこの作家固有のある精神性が現わされている。内面の深部に他者を導入するというその表現のしかたである。

その他者は、無論、自身をあずけることができるもつとも近い友達でなければならなかった。実際のモデルは武者小路実篤と思われる。志賀直哉は影響を受けた三人の人物の一人として実篤を挙げている。自身の内面と同一の平面上に他者が交わる。志賀直哉の生におけるこの見方がいかに重要な意味をもつか。

武者小路実篤

武者小路実篤は志賀直哉を一部モデルにした『友情』を書く。この作品は新聞に連載したもので、一九二〇年に一冊の本にまとめて刊行される。あらずじは、簡単にいえば、主人公の野島が心底恋慕する杉子を親友の大宮に取られてしまう話であり、大宮からそのことを告げる手紙が主人公に届く。手紙は究極の友情の証となる。杉子のほんとうの気持がその手紙に書かれる。大宮と杉子の恋愛は大宮と野島の友情を凌ぐ。一人残された主人公はかつて大宮から送られたベートーフエンのマスクを石にたたきつける。

かれは日記に書く。

「自分は淋しさをやつとたえて来た。今後なお耐えなければなら
ないのか、全く一人で。神よ助け給え」

主人公の野島は自身の破綻を神に祈る。どこにも持っていきようの

ない淋しさだけが残る。その視方は人間的世界を超えた神に向かう。

夏 目 漱 石

漱石が『ころろ』を新聞紙上に連載する。「先生」の自決に至る内面が描写されるこの作品は大正三年に書かれている。主人公の「先生」は下宿の御嬢さんを妻とする。かれは分けあって困窮していた郷里の友人Kを同じ下宿に引き入れる。Kは同様に彼女に思いを寄せる。このことを打ち明けられた「先生」はKを出し抜いて「奥さん」に直談判し「御嬢さん」を自分のものとする。切羽詰まったこの談判のかげにKがいた。

「彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働さえ、私にはなくなってしまったのです。」

その時の私は恐ろしさの塊りといひましようか、または苦しきの塊りといひましようか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のようには頭から足の先までが急に難くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われた位に堅くなったのです。」

Kにたいする「先生」の驚愕を漱石はこう書いている。追真のこの描写は友人Kに盗られるものの大きさを証している。「御嬢さん」にたいする「先生」の恋の深さである。

「先生」の恋愛はたやすく友情を凌いだように見える。が、友人K

への「先生」の心中の裏切りは拭いきれない罪の意識となつて自身を苦しめる。二人の結婚が決まったあと、Kは自らの命を絶つ。

「先生」はおいといて声を掛けました。しかし何の答もありません。おいどうしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上がって、敷居際まで行きました。其所から彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子で作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立に立ち竦みました。それが疾風の如く私を通過したあとで、私はまたああ失策だったと思いました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横わる全生涯を物凄く照らしました。そうして私はがたがた顫え出したのです。

「先生」の驚愕の真ん中にあつたものは、いうまでもない友人Kの自決である。Kの自決は「先生」にとつて他人事ではあり得なかつた。二人の人物の心中は直に通じ合っている。その自決はKにたいした「先生」のところに突き刺さる。「御嬢さん」への恋と友人Kにたいする心底の真人はまったく同一の重みをもつて描かれる。

「先生」は友人の死を自身に背負う。「私は私の生きてゐる限り、Kの墓の前に跪まずいて月々私の懺悔を新たにしたりしたかったです。」Kへの裏切りは自身の消えがたい罪となつて現われる。「私は今自分で

自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。」秘されつづけた「先生」のこのころの秘密が「私」に血汐を浴びせるが如く吐露される。

Kの死因について何度も自問して「先生」は考える。その真の理由は失恋でもまた現実と理想との衝突にでもあるのではなく「Kが私のようにたった一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうか」と疑い出す。「私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだ」という予覚が胸を横過する。

漱石は明治に生きた「先生」の孤独を「このころ」に描く。絶望と孤独は一つになる。その死をもつてのみ明瞭にされる自身の存在がここに語られる。それでもなお所決の果てに漱石が見ようとしたものがある。

それは、主人公の「先生」を受け止めてくれる一人の他者である。「私は何千万という日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから」である。

究極において妻への恋はKにたいする友情を超えはしなかつた。が同時にまた、親友Kの存在は妻へのその恋を凌駕しはしなかつた。恋と友の二律背反の極を、漱石はそこから逃げもせず、神に救いを求めもせず、一身に引き受ける。「先生」の自決である。

恋愛小説としての『暗夜行路』

志賀直哉は『暗夜行路』を書く。この小説は完成まで四半世紀を要した彼唯一の長編小説であり、作者自身の言葉にしたがえば、「外的

な事件の発展よりも、事件によって主人公の気持が動く、その気持ちの中の発展を書いた」としている。

『暗夜行路』は恋愛小説だという小林秀雄と河上徹太郎の批評を受けて志賀直哉はその見方を嬉しく思ったと「あとがき」に述べている。志賀直哉の説明によれば、父との不和を題材にする前身の私小説『時任謙作』が父との実生活上の和解を得て主題性を失うことになり、不義の子という新たに着想された主人公の境遇をもってそれが再び書かれる。

この長篇小説は「暗夜行路」五十三枚程とうとう書き上げた」と日記に記される最後の部分をもって完成される。そこに見られる大山の夜の描写は四半世紀を要したこの小説の究境の場面となって現われる。直哉が自ら振り返って書く山中のその一夜は文字通りこの長篇を仕上げる要石となっている。

『暗夜行路』は恋愛小説だというその見方に返ってみるとき、主人公をして大山に旅立たせたものは漱石が『こころ』に書くものに通じる。『こころ』における主人公は親友Kにたいする裏切りをもって妻を得る。恋と友とは相反する極をもって対立する。『暗夜行路』の主人公謙作は、妻の不義というかたちを換えた裏切りを前にする。肉体に結びつく恋と人間の精神の問題として存在する心の世界をこの二つの小説は同様にテーマとしている。

妻直子の過ちが述べられる。

「直子は急に眼を強く閉じ、首を曲げ、息をつめて顔中を皺しわにした。そしてそれを両手で被おほうと、いきなり突伏し、声をあげて烈

しく泣き出した。謙作は不意に自分の顔の冷たくなるのを感じた。彼は起き上り、何か恐いものに直面したよう、波打つ直子の背中を見下ろしていたが、少時しばしすると彼は自分の心が夢から覚めたよう却かえって正氣づいた事を感じた。彼は直子のこの様子を、どう判断していいかと先ずま思った。次に彼は兎に角自分達の上に恐い事が降りかかって来た事を明らかに意識した。(『暗夜行路』)

「不意に自分の顔の冷たくなるのを感じた」謙作の心中は、漱石が『こころ』に描く「彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働さえ、私にはなくなってしまうたのです」というもう一つの心中と、深淺を除けば、ほとんど同一の感情を分かちあっている。その感情の真ん中にあるものは絶望的なある喪失感である。その喪失感是自己の存在そのものにさえ及ぶ。

妻直子との感情の膠着がつづく。かれはいう。「半年程俺だけ何処か山へでも行つて静かにして見たい。医者に云わせれば神経衰弱かも知れないが、仮りに神経衰弱としても医者にかかつて、どうかするのは厭だからね」「天台の霊場とかで、寺で泊めてくれるらしい」伯耆の大山への「出家」を謙作が思いつくのは、こうしたことからである。

一見何気ない夫婦の会話にも見えるこの場面に隠されるものがある。ある筋肉質の精神である。直哉が現わすこの筋肉質の精神を今、漱石や実篤に見出すことは出来ない。漱石は肉体の所決に主人公自ら

最後の証しを見ようとするのであり、実篤はただ神のまゑに佇んで、寂寥に耐えようとする主人公の悲痛な孤独を述べるばかりである。直哉はこの二人の作家が絡みとられた桎梏から逃れようとする。

伯耆の大山へやって来て、体調すぐれぬまま、ご来迎を拝しようとするものの、途中、仲間から外れ一人山中に残る大山の一夜は、この長篇の結ぶ古典的場面といえるものになる。

深夜、山中にただ一人残された主人公は大山の星空の無辺の宇宙と向きあう。芥子粒ほどに小さくなった自身が宇宙的世界に溶解して行く。自身を微小化し宇宙的自然へと返すこの溶解的還元の上に自我は相対化され、救済される。原郷的宇宙へと赴いて自身を蘇生する志賀の自我のかたちがここに浮かび上がる。その自我の有様は、^{ありよう}実篤のそれとは違っている。

漱石の『ころ』における主人公は自ら命を絶つ。親友Kと同じ道を歩む「先生」は耐えきれぬ寂寥の果てにたった一人いる。現実世界の絶望に他ならない「先生」の自決は漱石の文学におけるある彼岸性を語っている。

自らの命そのものを絶つて「先生」が見ようとするものは自身のこの世界に他ならない。此岸における自身の否定は無論「先生」の生の破滅的清算ではない。所決の後にあるものは、もはや人のいない単なる空虚ではない。そこに遺されるものがある。「先生」のこのころの条痕である。その条痕は此岸の生を超える。「先生」の死が意味する現実の超越である。漱石のその現実世界は、明治という一時代につながっていることは云うまでもない。

漱石はまた『硝子戸の中』の中に書いている。「もし世の中に全知全能の神があるならば、私はその神の前に跪^{ひざま}すいて、私に毫髪^{ごうはつ}の疑を

挟^{さしか}む余地もないほど明らかな直覚を与えて、私のこの苦悶から解脱せしめん事を祈る。でなければ、この不明な私の前に出て来る凡ての人を、玲瓏^{れいろう}透徹な正直なものに変化して、私とその人の魂がぴたりと合うような幸福を授け給わん事を祈る。今の私は馬鹿で人に騙されるか、あるいは疑い深くて人を容れる事が出来ないか、この両方しかないような気がする。」

時代と究極のところでは折合わない自身の存在が行き場を失って乖離する。漱石が「Kが私のようにたった一人で淋^{さみ}しくて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうか」と書く件^{くだり}はこのことをまさに現わしている。

実篤は繰り返せば「自分は淋しさをやつとたえて来た。今後なお耐えなければならぬのか、全く一人で。神よ助け給え」と『友情』の末尾を結ぶ。実篤は、耐えきれぬ淋しさを神の前にただ独白する主人公を描く。素朴な仕方に留まるものの実篤に見る彼岸性は明瞭である。

しかしながら漱石、実篤に見られるこうした彼岸性を直哉は書いてはいない。

「彼は自分の精神も肉体も、今、この大きな自然の中に溶込んで行くのを感じた」のである。「大きな自然の中に自身が溶込んで行く」この心持ちは彼岸の世界のものではない。此岸に見るある身体的な心地よさである。志賀直哉が描写するこの身体的世界を漱石も実篤も現わしてはいない。

直哉は書いている。「彼は、今、自分が一歩、永遠に通ずる路に踏出したというような事を考えていた。彼は少しも死の恐怖を感じなかった。然し、若し死ぬならこの儘^{まま}死んでも少しも憾^{うら}むところはないと

思った。然し永遠に通ずるとは死ぬ事だという風にも考えていなかった。」

「永遠」は「死」を意味してはいない。それは、自身の身体を包む無限のひろがりとなって現われる、大山の夜空の永遠性なのである。そこに見る永遠は彼岸のものではない。それはむしろ此岸の側に存在している。このことを可能にしているものは志賀直哉その人の身体に他ならないからである。

われわれは彼の身体に成立するある持続的な視を見る。この持続的な視は単なる静観ではない。その視はいわば視の行為化ともいえるべき一つの持続であり、いわゆる「まなざす」という言葉に現わされるあの身体的意味を含む。

志賀直哉の文学は、この「まなざし」のなかに生まれている。その「まなざし」のなかに、かれは求めるものを見ようとする。

漱石は主人公の肉体の所決に精神の証しを見る。そこに流れるものはほとんど生の諦念に近い。漱石の精神は他者のいないその諦念を生きたる。実篤の『友情』の主人公は友も恋も失う。淋しさだけが残る。かれはたった一人ぼつねんと佇む。神への祈りを唯口にし得ただけの残酷なまでのその淋しさは人間的世界を超えている。これにたいして、直哉は自身の胸中に通ずる生身の人を求める。かれは所決でもなく、神のまえでもなくまさに自らが生きるその此岸の世界に立っている。

ここに還れば『伊ツク川』はまさにこのことを書いている。かれは心底に通ずる他者を此岸に求める。直哉のこの自我のかたちは漱石、実篤とは異なる独自の意味を現わしている。

(1) 注

最近の研究で、この手紙は実際に武者小路実篤が志賀直哉に宛てたものであることが明らかにされる。山口直孝：志賀直哉「大津順吉」関連武者小路実篤書簡 日本近代文学館 第二四九号 二〇一二年九月十五日